

2013年度 中央大学特定課題研究費 一研究報告書一

所属	経済学部	身分	准教授
氏名	本田 貴久		
NAME	Takahisa HONDA		

1. 研究課題

(和文) 20世紀两大戦間期のフランスにおける人類学と文学の結節点

(英文) A Point of contact between the anthropology and the literature in France in interwar period

2. 研究期間

2年間

3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600字程度、英文 50word程度）

(和文)

本研究は、フランス文学への人類学の影響というものを、ともに人類学に関わりのあるジャン・ポーランおよびミシェル・レリスという作家の作品や経歴を通してさぐることを目的としている。

報告者は2013年にアフリカのマダガスカルへ出張し、ポーランが研究したマダガスカルの諺にまつわる資料調査を行った。ポーラン滞在当時、マダガスカル語において諺は、民衆の会話にしばしば挟み込まれ、重要な役割を担っていた。研究では、ポーランの初期の論文 (*Les hain-teny merinas : poésies populaires malgaches*) におけるいくつかの考察が20年を経て、彼の文学理論の中核を占める『タルブの花』に大きな影響を与えていることを実証することをめざした。その成果は中大人文研の公開研究会で発表している。さらに論文としての成果は近日中に発表する予定である。

つぎに人類学という学問は、西洋の合理主義文明とは異なる異質の思考を他者の社会から見いだすことだといえるが、それはすぐに合理主義を批判するかっこうの道具となった。人類学者であった詩人ミシェル・レリスは、キューバに赴き、キューバというやはり西洋とは異質な文明の中で革命が根ざしていくさまを詩人として人類学者としてつぶさに観察している。そのなかで詩が詩人による言語のパフォーマンスではなく、文化や社会のメッセージたりえるという詩論へ変化したのではないか。そうしたなかで彼自身の詩は、戦前のシュルレアリズムの色彩の強いものから、格言のような短いものへと変質したのである。上記の仮説を実証した論文を発表した。

（英文）

In this project we try to clarify the influence of the anthropology over the French writers whose carrer begun in interwar period, such as Jean Paulhan and Michel Leiris. At first we went to Madagascar to see how Paulhan studied Malagasy proverbs to elaborate his literary thoery. And then, we see the influence of the Cuban culture in the poetics of the anthropologist poet Michel Leiris.

4. おもな発表論文等（予定を含む）

【学術論文】（著者名、論文題目、誌名、査読の有無、巻号、頁、発行年月）

Takahisa HONDA, « Vers la forme poétique brève, ou la Révoution », *Modernités*, no 37, pp. 167-176. Presses Universitaires de Bordeaux, 2014.09.

【学会発表】（発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）

本田貴久、「ジャン・ポーランとマダガスカル」、中央大学人文科学研究所「モダニズム研究」公開研究会、2013年11月

【図書】（著者名、出版社名、書名、刊行年）

【その他】（知的財産権、ニュースリリース等）